

長崎県感染症発生動向調査速報

平成24年第47週 平成24年11月19日（月）～平成24年11月25日（日）

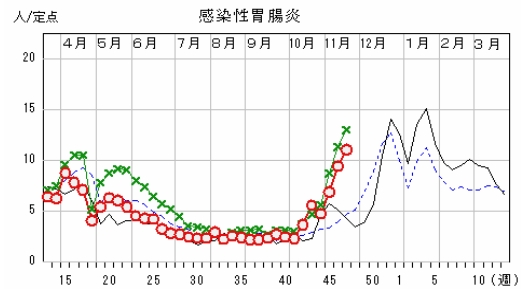
☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

（1） 感染性胃腸炎

第47週の報告数は487人で、前週より73人多く、定点当たりの報告数は11.07であった。

年齢別では、1歳（89人）、2歳（57人）、3歳（47人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、県央保健所（19.33）、県南保健所（14.40）、長崎市保健所（11.50）が多かった。

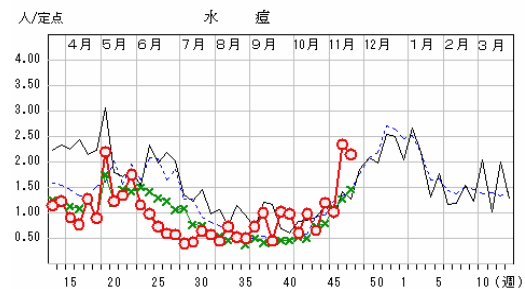


（2） 水痘

第47週の報告数は94人で、前週より9人少なく、定点当たりの報告数は2.14であった。

年齢別では、2歳（21人）、1歳（20人）、3歳（13人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、五島保健所（5.75）、県北保健所（3.33）、県南保健所（2.60）が多かった。

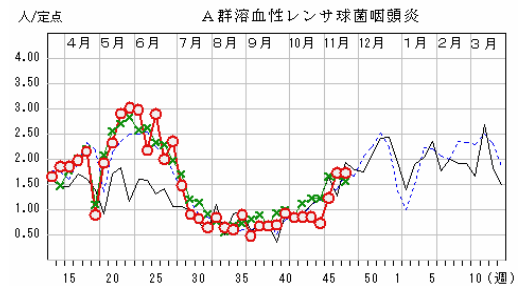


（3） A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第47週の報告数は76人で、前週より0人少なく、定点当たりの報告数は1.73であった。

年齢別では、10～14歳（15人）、5歳（13人）、6歳（13人）の順に多かった。

保健所別の定点当たり報告数は、長崎市保健所（3.10）、西彼保健所（2.75）、県央保健所（2.33）が多かった。



○—○ 当年(長崎県) — 前年(長崎県)
×—× 当年(全国) - - - 前年(全国)

☆トピックス・季節情報

【感染性胃腸炎】

長崎県における第47週の報告数は487人で、前週より73人増加して、定点当たりの人数は11.07となりましたが、全国定点当たりの人数（13.02）より低値でした。県下全域から報告があり、4週連続して患者数が増加しています。中でも県央地区（19.33）、県南地区（14.40）、は全国定点当たりの人数以上の高値を示しており、長崎、佐世保、西彼、対馬地区でも10.0を超えています。

例年10月から11月にかけて流行の立ち上がりが見られ、12月中旬頃がピークとなる傾向にあることから11月13日には、厚生労働省より、「感染性胃腸炎の流行に伴うノロウイルスの予防啓発について」の通知が出されたところですが、本疾患による患者数の全国的な増加が、同時期では過去10年で平成18年に次ぐ高い水準であることから、11月27日に同省から「感染性胃腸炎の流行状況を踏まえたノロウイルスの一層の予防啓発について」の通知が出されました。本格的な流行期となりましたので、十分な注意が必要です。

感染性胃腸炎は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くは1～2歳の乳幼児が占めています。原因はロタウイルス、ノロウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。

このうち、ロタウイルスは2011年7月にワクチンが製造承認され、2012年7月には国内2製品目が発売されており、予防することが出来るウイルスです。小さいお子さんがいらっしゃるご家庭では、保護者の方が手洗いの励行、体調管理や体調の変化に心掛けてあげるなどして感染防止に努め、早目に医療機関を受診させてあげるよう心がけましょう。

（参考：厚労省HP <http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/03.html#link01>）

【水痘】

長崎県における第47週の報告数は、前週より9人減少して94人でした。定点当たりの報告数は2.14で、前週と同様、全国定点当たりの人数（1.46）を上回っています。中でも五島地区では注意レベルの（4）を上回り（5.75）、県北地区では3.33と高値を示している地域もあります。また、上五島、対馬地区を除く県下全域で報告があがっています。この疾病は、例年冬場に患者数が増加する傾向にありますので、今後の動向に注視していく必要があります。

水痘は水疱瘡（みずぼうそう）とも呼ばれ、原因となる水痘帯状疱疹ウイルスは伝播力が強く、ウイルスを含む飛沫あるいは飛沫核を経気道的に吸入することによる飛沫感染あるいは水疱の内容液と触れることによる接触感染により感染が成立します。手洗いの励行、体調管理に心がけ感染防止に努めましょう。

【A群溶血レンサ球菌咽頭炎】

長崎県における第47週の報告数は前週と同数の76人で、定点当たりの人数は1.73でした。例年、冬にむけて報告数が増加傾向にありますので、今後の動向に注視していく必要があります。

本感染症の好発年齢は5～15歳で、鼻汁・唾液中のA群溶血性レンサ球菌の飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1～4日で、突然の発熱（高熱）、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により多くは1～2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早期に医療機関を受診するとともに、手洗いやうがいを行って、感染防止に努めましょう。

☆トピックス：風疹に気をつけましょう。

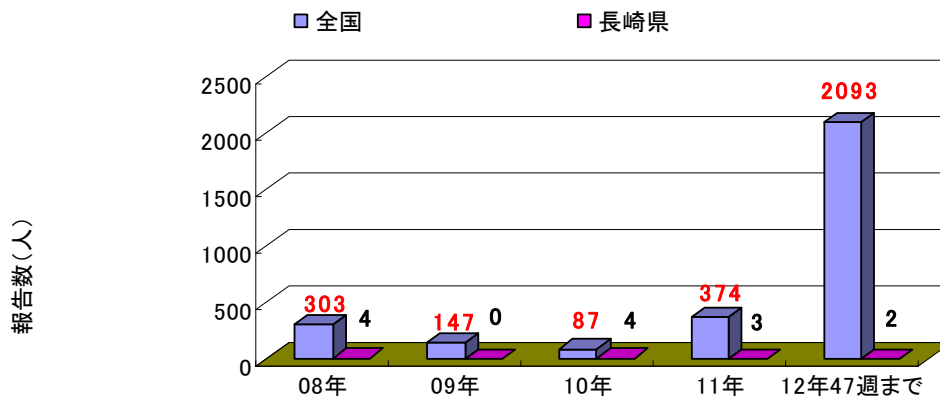
風疹（三日はしか）の報告数が首都圏を中心に過去5年間に於いて最も急激に増加しています。その内訳は20～40歳代の男性が全体の約6割を占めており、風疹ワクチンの接種対象が1994年まで中学生の女子に限られたため、この年齢層には免疫がない男性が多数存在していることが今回の流行に大きく影響しているようです。

第1週から47週までの間、本県では第35週に1件、第41週に1件（30代前半の帰省者）、計2件の発生報告がありました。全国報告数は前週（2039人）より54人増加して2093人となり、昨年の5倍以上の総患者報告数となっていますが、報告数の増加率は緩やかに転じてきているようです。

風疹はせきやくしゃみなどから感染し、通常は発疹や発熱が起きますが軽微な症状で経過し、重篤化することはほとんどありませんが、妊娠初期3ヶ月までに感染すると、胎盤を経て胎児にも感染し、先天性の心疾患や難聴、白内障など（先天性風疹症候群：CRS）を引き起こす危険性がある恐ろしい感染症でもあります。

風疹やCRSは予防接種により予防可能ですが、妊婦へのワクチン接種は禁忌であるため、妊婦にうつすことのないよう、配偶者や周囲の人は医師と十分相談の上、抗体検査やワクチンの接種を実施することが重要です。

本県での報告数は少ないですが、今後の風疹の動向に注視して十分に注意しましょう。



報告年(2008～2012年第47週まで)

過去5年間の全国と長崎県の風疹の報告数の推移

☆トピックス：日本脳炎に注意しましょう。

長崎県では日本脳炎の流行予測を目的として、毎年7月～9月の間に日本脳炎ウイルスの主な増幅動物であるブタ（県内産肥育ブタ）のウイルスへの感染状況を調査しています。日本脳炎はウイルスに感染したブタを吸血した蚊によって媒介され、ヒトに感染することから、ブタの感染率が上昇すると日本脳炎が発生しやすい状況にあると考えられます。今年は梅雨に例年以上の降水量と長雨が続いたため、ブタへの感染率の立ち上がり例年より遅れていましたが、8月末に検査したすべてのブタの感染が確認され、9月に本格的な流行期になりました。

本年は、9月末に熊本県から、全国初の日本脳炎患者が報告されました。熊本県では2009年以来3年ぶりの患者発生となります。本県では平成22年（諫早市）、平成23年（諫早市・五島市）と2年続けて患者が発生しています。

日ごとに寒さが増し、先週に続いて12月中旬頃の気温になっていますが、温暖な気候の本県では11月でも1日の平均気温が20℃を超える日もあります。昨年11月には患者発生があったことから、十分な注意が必要です。

日本脳炎は日本脳炎ウイルス（Japanese encephalitis virus: JEV）によって起こるウイルス感染症です。人にはこのウイルスをもっている蚊、主にコガタアカイエカに刺されることによって感染します。患者発生は西日本に多く、蚊の発生時期である夏から秋にかけて報告されています。なお、人から人への感染や感染者を刺した蚊に刺されても感染することはありません。

潜伏期間は5～15日で、数日間の高熱、頭痛、嘔吐、めまいを発症し、重症例では、意識障害、けいれん、昏睡などがみられ、マヒ等の重篤な後遺症が残る可能性もあります。しかし、感染しても日本脳炎を発症するのは100～1000人に1人程度で、大多数は無症状で終わります。ただし、幼児および高齢者では発症率が高く、発病すると死亡率は20～40%で、幼児や高齢者では死亡や後遺症の危険性が高くなります。

長崎県感染症情報センター

予防にはワクチン接種が有効です。特異的な治療法はなく、一般療法・対症療法が中心で、肺炎などの合併症の予防を行います。また虫除けスプレーや長袖などを着用、媒介する蚊（主にコガタアカイエカ）に刺されないような工夫が大切です。

ワクチン接種の詳細については厚生労働省のホームページを参考にしてください。

【厚生労働省ホームページ】

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou20/annai.html>



コガタアカイエカ
国立感染症研究所HPより

長崎県、全国の患者発生状況(人)

	H23	H22	H21	H20	H19	H18	H17	H16	H15	H14	H13
長崎県	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
全国※	9	4	3	3	10	7	7	4	2	8	5

※1960年代で毎年数百名の患者が報告されていましたが、1992年以降、毎年数名までに減少しています。

